

# 大学正課体育の授業に関する研究 (その2)

—生涯体育に向けた効果的体育授業に関する基礎的研究—

小原 晃, 外川 重信

## Study on Teaching of University Regular Physical Education Class ( II )

— the fundamental study of effective physical education class  
for life-long physical education —

Akira Obara and Shigenobu Sotokawa

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the present consciousness of student toward life-long physical education and to gain the fundamental data to study how the guidance of life-long physical education should be in the general physical education

The investigation was conducted from January to February in 1984.

The subject of this investigation consisted of 1,563 students who attended general physical education in the University of Tsukuba. The number of recovering questionnaire was 1,085 (the recovery rate 69.4%).

The items of questionnaire were as follows.

- 1) Maintenance and improvement of health
- 2) Maintenance and improvement of physical fitness
- 3) Acquisition of motor skills
- 4) Improvement of social attitude
- 5) Foundation of life-long physical education

The items concerning life-long physical education were selected from the above items. The data from these items were statistically analyzed.

The results were as follows;

- 1) The positive intention to exercise were indicated in all items.
- 2) The content of intention to exercise was negative in both high-intention group and low-intention one.
- 3) Students oriented the balance between physique and physical fitness rather than improvement of power and endurance.
- 4) Few students positively intended to participate in sports group
- 5) Most students were interested in spectator sports.

From these results, it is recognized that the students should be taught to exercise with positive attitude both in the present and in the future.

## I 緒言

本研究は、「大学正課体育における授業効果に関する調査研究」<sup>1)</sup> (昭和58年度筑波大学体育センター・プロジェクト研究)の継続研究である。

正課体育の在り方に関する研究は、昭和52年度及び昭和55年度に「正課体育に関する調査」<sup>2)</sup>がなされ、「正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的教育方法の改善に関する研究」<sup>3, 4)</sup>で報告された。さらに昭和58年度の研究では、これまでの研究成果をふまえて、正課体育授業のよりよい改善をはかるための基礎資料を得るために、調査項目の検討がなされ、次の項目によって調査が実施された。1.健康, 2.体力, 3.運動技能, 4.社会的態度, 5.生涯体育の5項目である。

この結果は、「体育の目標に関する現状および授業効果に関する調査研究」として、大学体育研究」第6号で報告された。

本研究では、これらの研究成果をふまえて、生涯体育の観点から、正課体育授業の在り方を再検討し、授業改善をはかるための基礎資料を得ることを目的としている。

本研究における生涯体育の観点は、筑波大学正課体育の目的である「身体運動文化を体験させることによって、学生生活を豊かにし、さらに進んで、将来の社会生活を充実されることを目的としている」<sup>5)</sup>ことをふまえて、生涯体育に関わる具体的なねらいとして、1.適切な身体運動の必要性を認識させ、必要な能力や態度の育成, 2.能動的な社会性や人間性の育成, 3.身体運動文化の正しい認識と、将来、社会体育や社会福祉の発展に寄与できる実践的能力を培う, 4.現在、および将来にわたって、スポーツを行うことのできる資質、能力を高め、望ましい態度を育成する、<sup>6)</sup>ことが示されている。

生涯体育を前述の視点から据えて、正課体育の見直しと、教授=学習過程の改善をはかることにある。

本研究では、第1に、学習主体としての学生が、将来の運動実践を、どのように考えているか、について明らかにしようとするものである。

特に、将来の運動実践の意図について、現在の正課体育授業との関連で、今後の運動実践の意図の実態が、どのようになっているのかについて、より具体的な意図の内容、及び問題点を明らかにすること。

第2に、生涯体育に向けられる、教授=学習過程の改善のための具体的な基礎資料を得ることである。

## II 研究方法

### 1. 調査項目 (161ページの調査用紙参照)

調査項目は、生涯体育に関わる今後のスポーツ活動の意図をみるために、「体育授業の目標に関する現在の状態」の調査項目、1.健康 (5項目)、2.体力 (8項目)、3.運動技能 (8項目)、4.社会性 (5項目)、5.生涯体育 (5項目)のそれぞれの設問に回答させた。

質問に対する回答は、5.非常によく当てはまる、4.当てはまる、3.どちらとも言えない、2.あまり当てはまらない、1.まったく当てはまらない、の5段階法によって回答させた。

### 2. 調査の方法およびデータの処理

#### (1) 調査の実施方法

調査対象は、筑波大学で、正課体育を受講している学生、1,563名で、抽出は無作為に行った。

調査は、昭和59年1月下旬から、2月上旬にかけて実施した。

回収されたサンプル数は、1,085 (有効回収率69.4%)であった。

#### (2) データの処理

調査用紙の回答をフロッピーディスクを媒体として、筑波大学学術情報処理センターの大型電算機 (FACOM M-200) に入力し、SPSS プログラム・パッケージにより調査項

目から、生涯体育に関わるものとみなされる項目、1. 健康を保持・増進するために、今後、自主的に運動を行っていくつもりである、2. 体力の維持・向上をはかるために、今後、自主的に運動を行っていくつもりである、3. 技能の向上をはかるために、今後、自主的に練習を行っていくつもりである、4. スポーツ・デーなどのスポーツ行事に、今後、積極的に参加するつもりである、を抽出した。

以上の4項目を選び、さらに、1. 2. 3. を合せた「健康・体力および技能の向上のための運動実践の意図」の項目と、4. 「スポーツ行事への参加の意図」の二つの項目に設定した。

また、問題点の所在を端的に把握するために、調査項目に対する5段階回答法の1. まったく当てはまらない、2. あまり当てはまらない、以上の2段階に回答した者については、今後の運動実践に対する意図の弱い群とし、4. 当てはまる、5. 非常によく当てはまる、以上の2段階に回答した者については、今後の運動実践の意図の強い群、の2階層に分類して抽出した。

尚、三項目を合せた「健康・体育および技能の向上のための運動実践の意図」の項目においては、それぞれの各項目の全てが、5段階評価で5、あるいは4、を回答した者を「運動実践の強い群」、2あるいは1を回答した者を「弱い群」とした。

中間層の、3. どちらとも言えない、の層については削除する方法がとられた。

抽出した二つのデータは、次の項目とのクロス集計によるものである。

1. 健康の保持・増進に関する意図、2. 体力の維持・向上に関する意図、及び、体力要素の水準の意図、3. 運動技能の習得に関する意図、4. 社会的態度や能力の育成に関する意図、5. 生涯体育への基礎づくりに関する意図、以上の5項目である。

この結果は、各項目ごとに、運動実践の強

い群、及び意図の弱い群とを対比させて、分析、検討するために図表化して表わした。

問題点の抽出法は、意図の強い群と、意図の弱い群との差の状態、及び両者の相対的な傾向を基準とした。

## Ⅱ 結果および考察

図1～図5は、「健康・体力および技能の向上のための運動実践の意図」（意図の強い群74名、弱い群80名）と「スポーツ行事への参加の意図」（意図の強い群329名、弱い群365名）における他の項目との関係を示したものである。

### 1. 健康の保持・増進に関する意図

図1は、今後、運動実践をしていくに当って、健康の保持・増進に関して、どのような意図をもっているか、についての応答結果を示したものである。

運動実践の意図の強い群は、「身体的・精神的に健康であるために」「健康の重要性を理解しているから」および「健康のための方法の理解」で、いずれも、4.05以上の高い値を示している。

特に、健康の保持・増進のための具体的な運動実践についての、意図の強い群は、4.37と高い肯定度を示しているが、弱い群については、1.64と低くなっており、その差は2.73と大きい。

スポーツ行事への参加の意図についても同様の傾向を示している。

これらの結果から、健康の問題に関する認識については、将来的にも運動実践の意図がもたれている反面、自主的な運動実践の意図については、かなり消極的なものであることが言える。

### 2. 体力水準に関する運動実践の意図

図2- (1) は、今後の運動実践の意図について、体力水準との関係について示したものである。

体力のうち、行動体力に関する運動実践の

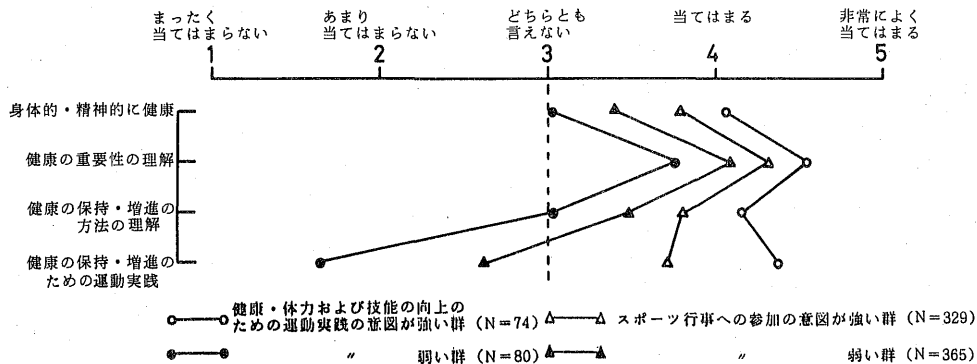


図1 健康の保持・増進に関する意図

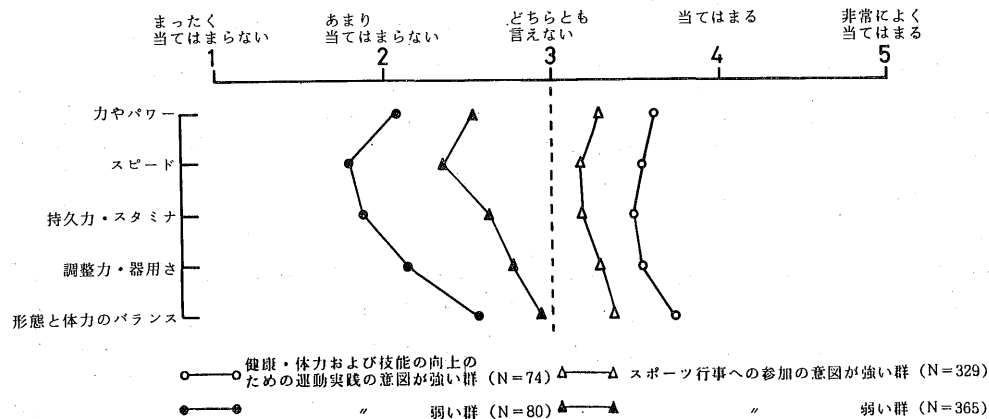


図2- (1) 体力要素の水準

意図には否定的で、力やパワーが、5段回答法で、2.08、スピード1.80、持久力1.88、調整力2.14と低くなっている。

形態と体力のバランスについては、意図の強い群3.71と、弱い群2.50との差は少なく、特定の体力よりも、体力のバランスを志向している。

スポーツ行事への参加の意図についても同様に、形態と体力のバランス志向である。

これらの結果から、体力水準に関する運動実践の意図されているものは、特定の体力よりも、形態とバランスの総合的体力を意図するものに有意性が認められる。

したがって、生涯体育の視点から、体力水

準について検討する場合、体力づくりの方向としては、総合的体力の観点からの指導の在り方の検討がなされる必要がある。

### 3. 体力に関する運動の意図

図2- (2) は、今後の運動実践の意図について、体力との関係を示したものである。

意図の強い群は、体力の重要性の理解4.43と高く、弱い群も3.40で、理解の肯定度が高い値を示している。

体力の維持・向上の方法の理解の意図の強い群は、4.16で肯定度は高いが、意図の弱い群は、2.75で比較的その差が少ないことが特徴となっている。

特に、体力の維持・向上のための運動実践

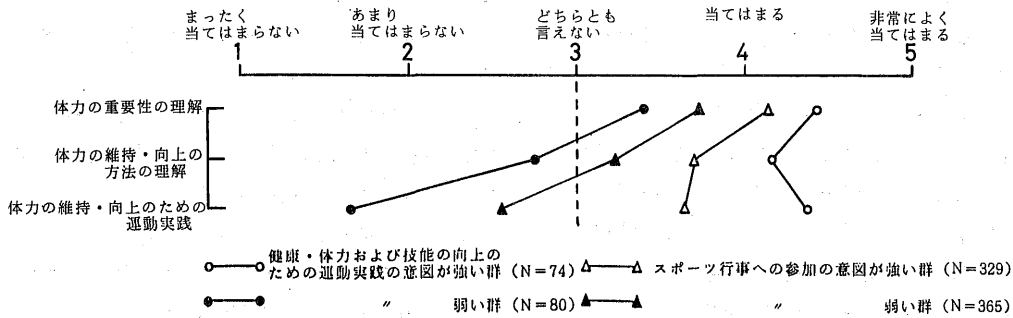


図 2 - (2) 体力の維持・向上に関する意図

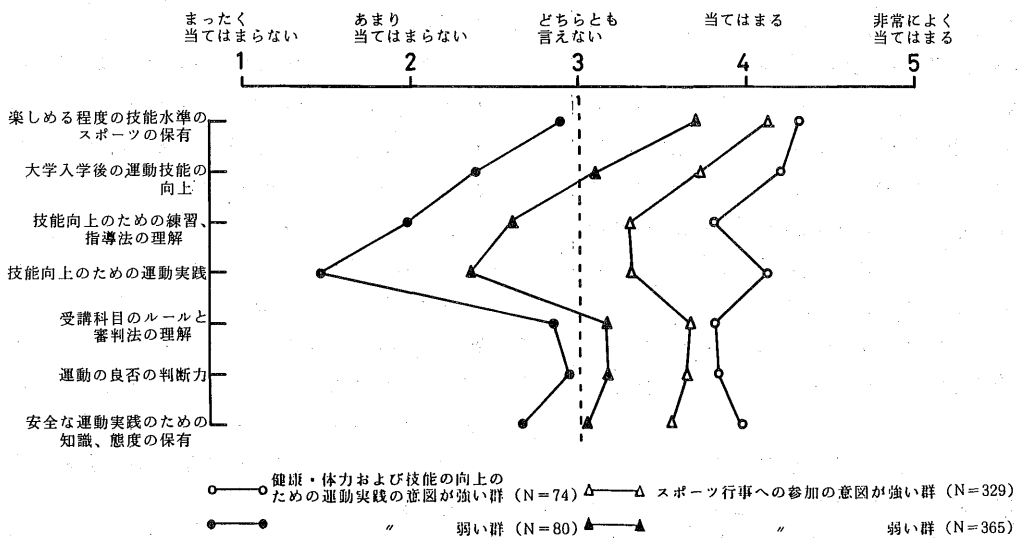


図 3 運動技能の習得に関する意図

については、意図の強い群4.37で高く、弱い群1.65との差2.75は、顕著な結果を示している。

スポーツ行事への参加の意図についても、意図の弱い群1.58で、体力のための運動実践の意図が低いことを示している。これらの結果から、体力との関係での運動実践の意図の傾向は、全体として、体力の重要性、方法等の理解に関しては、高い肯定度を示しているが、体力のための運動実践の意図は、否定的な考えをもつ者も多いことがわかる。

このことから、正課体育授業においては、体力に関する理解、方法の内容とともに、将

来的に体力の維持・向上のための具体的な運動実践へ向けた指導の必要性があると判断される。

#### 4. 運動技能に関する運動実践の意図

図 3 は、運動技能と、今後の運動実践の意図との関係を示したものである。

項目の全てについて、意図の強い群と弱い群との差の開きが大きくなっているのが特徴となっている。

特に、技能向上のための運動実践は、意図の強い群4.12、弱い群1.46であり、その差2.66と最も高い値を示している。

次いで、技能向上のための練習、指導法の理解に関しては、意図の強い群3.80、弱い群1.98で、その差1.82となっている。

また、楽しめる程度の技能水準のスポーツの保有については、意図の強い群としては最も高く4.31で、意図の弱い群2.89との差が、比較的少なくなっている。このほかに、差が少ないとみられるのは、運動の良否の判断力、安全な運動実践のための知識、態度の保有となっている。

スポーツ行事への参加意図は、技能向上のための運動実践で、意図の強い群4.05、弱い群1.43で、その差2.62と大きくなっている。

これらの結果から、今後の運動実践の意図は、楽しめる程度の技能水準の保有を意図する者が非常に多いことが認められる。その反面、技能向上のための運動実践、技能向上のための練習等の意図については、否定的な者が多いということが言える。

スポーツ行事への参加意図についても、技能向上との関連は薄いと考えることができる。

このことから、正課体育の指導は、楽しめる程度の技能水準の保有にとどまらず、より楽しめる運動技能の向上をはかるための指導の必要性があると考えられる。

## 5. 社会性に関する運動実践の意図

図4は、社会性と運動実践の意図との関係を示したものである。

スポーツにおけるマナーの理解と実践は、意図の強い群4.05、弱い群3.39で、その差は0.66と僅少で、肯定度が高い。

スポーツ活動における協力と責任については、意図の強い群4.04、弱い群2.94で、その差は1.10と少なく、比較的肯定されている。

運動集団への積極的参加では、意図の強い群3.92、弱い群1.74で、その差2.18と大きくなっている。

同様に、スポーツ活動の練習や試合の進行、および将来におけるスポーツ活動の推進と指導の項目についても、意図の強い群と弱い群との差が大きく、否定的な応答がめだっていることを示している。

これらの結果から、スポーツ活動における理解や実践協力と責任などの個人に関わる問題については、肯定的であるが、スポーツ集団への積極的参加、リーダーシップとしての練習や試合の進行、スポーツ活動の推進者等については、否定的な意図をもつ者が非常に多いと言える。

このことから、生涯体育への正課体育授業では、社会的態度の問題として、運動実践の

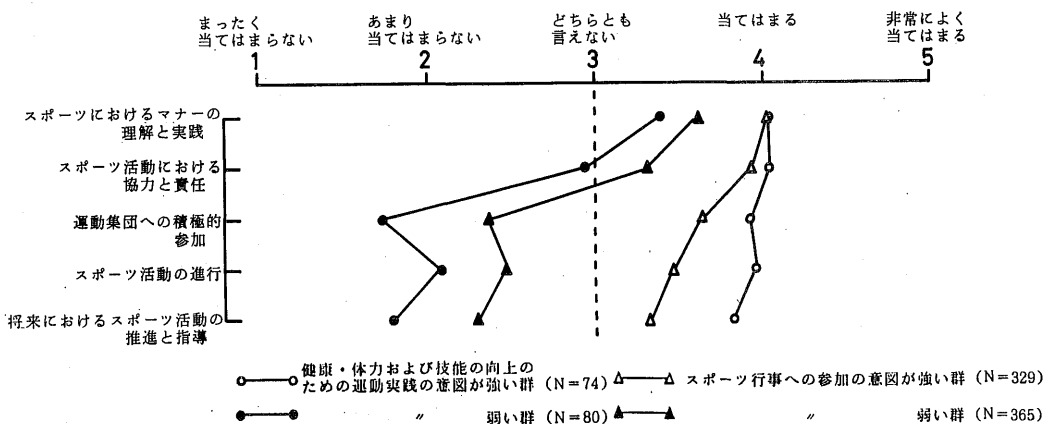


図4 社会的態度や能力の育成に関する意図

在り方については、消極的実践から、積極的参加への指導性の必要が求められるものと考えられる。

## 6. 生涯体育に関する運動実践の意図

図5は、生涯体育に関連し、運動実践の意図との関係を示したものである。

スポーツ観戦への嗜好については、意図の強い群4.41、弱い群3.28、ともに肯定度が高い値を示している。

体育・スポーツへの興味・関心についても、意図の強い群4.57、弱い群2.85となっており、興味、関心の意図が高いことを示している。

一方、豊かな日常生活のための、スポーツ実践の意図の強い群は4.31、弱い群は1.84で、その差は2.47となっており、否定的応答が多いことを示している。

さらに、スポーツ行事への参加に関しては、意図の強い群3.42、弱い群1.66で、その差は1.76となっている。

これらの結果から、体育・スポーツへの興味と関心、およびスポーツ観戦の意図が顕著であり、調査項目にある豊かな日常生活のため、とする運動実践と、スポーツ行事への積極的な参加については、否定的な意図をもつ者が多いと言える。

このことから、生涯体育へ向けられる正課体育での授業の在り方は、将来的にも行動化

に結びつく教授＝学習過程の研究の必要性が認められる。

## VI まとめ

生涯体育に向けた、効果的体育授業の在り方を検討するために、正課体育での授業効果の状態と生涯体育への意図について、比較検討した結果、次のことが明らかになった。

(1) 全ての項目にわたって、今後の運動実践の意図が強い群に有意差が認められた。

(2) 全体的に、運動実践の意図の強い群と、弱い群との差でみると、今後の運動実践の意図は、両者ともに、消極的内容となっている。

(3) 健康の保持・増進のために、運動実践の意図の強い者の肯定度は高いものの、意図の弱い者については、極端に否定的応答がみられた。

(4) 体力水準は、形態と体力のバランスが意図されている。

(5) 体力のための運動実践の意図は低い。

(6) 運動技能は、楽しめる程度の技能水準を意図する者が多い。

(7) 社会性については、今後、スポーツ集団への積極的な参加を意図する者は少ない。

(8) 体育・スポーツへの興味・関心は高く、特に、スポーツ観戦への嗜好を意図する者が顕著である。

これらの結果から、生涯体育に向けられる

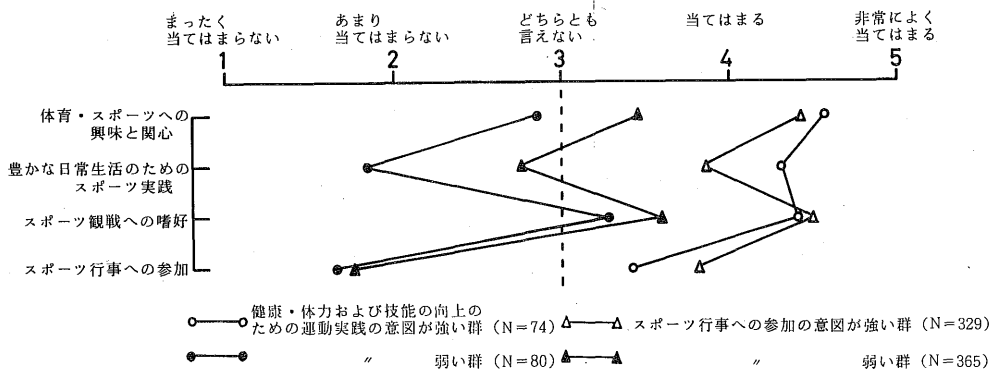


図5 生涯体育への基礎づくりに関する意図

正課体育の指導においては、以下のことについて検討がなされる必要がある。

卒業後の運動実践への意図は、観念的で、具体的な手だてについては定着されていない。したがって、将来的志向は、消極的な応答となっている。

このことから、今後の検討課題として、運動実践が将来にわたって、継続されるための教授＝学習過程の検討が課題となる。

## 引用文献

- 1) 海野 孝 他「大学正課体育における授業効果に関する調査研究」大学体育研究第6号 筑波大学体育センター昭和59年3月 pp. 105～124.
- 2) 浅田隆夫 他「高等教育におけるマネジメントシステムの開発研究」大学体育研究第1号 筑波大学体育センター昭和54年.
- 3) 「正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的方法の改善に関する研究」第4報 大学体育研究第3号 筑波大学体育センター昭和56年3月.
- 4) 前掲3) 第4号 昭和57年3月 pp. 105～200.
- 5) 浅田隆夫 筑波大学正課体育の目的・内容 「大学体育教本」筑波大学体育センター, 大学体育研究会 不昧堂書店 昭和52年6月 p. 10
- 6) 前掲5) pp. 10～10.